

とも關係があるであらう、種々の教が左程劇しく相排撃することもなく並び存してゐる吾が國の現状が、日本人の特質の顯著な現れと見得ると共に、この現状に面する實際的教育者もまた著者の所謂「日本的」な態度をとることを必然的に要求されるであらう。そして、この事實に一つの大きな問題が潜んでゐる様に思はれる。

維新以後わが國の文化は一種の混沌状態にあるわけであるが、混沌を眞に脱する道はそれを積極的に克服することの外にはなく、混沌を克服する唯一の健全なる道は、混沌が混沌でなくなる所までそれに徹することの外にはない。従つて日本文化や東洋文化への根本的な反省と西洋文化の出来る限り深く廣い攝取とが同時に行はれねばならぬことは勿論、この兩方向が分裂した儘で残らざるを得ない限りは、その分裂を荷ひ分裂に堪へて行かねばならぬ。混沌を克服する新しい創造の力はそこから養はれて来る筈である。言ひ古されたことではあるが、西洋文化と東洋文化の全體とが合流し、その意味で眞に「世界」の文化を荷つてゐる此の唯一の國が、將來の「世界」文化に對しても得る世界史的意義もそこにあることは疑ない。そのためには、宗教のみに就いていつも、佛教は現代の人心に深く根を下したものとなり得るために、そしてまた廣く世界をその國土となし得るために、恰も鎌倉時代に於て爲されたに等しい新しい飛躍を再び必要とするのではあるまいか。又、基督教も、その歴史的傳統をもたぬ國に移植されたといふことを積極的に生かして、西洋に於てそれに纏はつてゐる長い間の歴史的因襲を

一切捨て去つた自由清新なる形態を、日本的な（日本主義的ではない）基督教として建設し、更にそれを西洋の基督教自身に與へることによつて之に新しい展開を齎すといふ如き方向に進むべきであると言へば、單なる誇大な空想であらうか。それは兎も角、本書に現はれてゐる如き、そして一般の人々の抱いてゐる如き、自由なる包容的態度が、日本文化に含まれてゐる將來の方向と深い聯關をもつことは、間違ないであらう。

本書の優れた價值については、その初めに附せられた安倍能成先生の序に餘蘊なく説かれてゐる。たゞ本書が、如何なる宗教宗派に屬する又は屬しないに拘らず何人にも有益なる感ずるの餘り、こゝに蛇足を加へたのである。（岩波書店定價壹圓五拾錢）（西谷啓治）

ブルノー著「カントの哲學」篠原寛二譯

本書はブルノー・パウフ著「イムマヌエル・カント」（ゲッティンゲン叢書「哲學史」第五冊）の全譯である。同じ著者は本書に基づいて一九一七年に更に詳細な大部のカント研究書を同題名の下に發表して居るのであるが、譯者が前者を「内容に従つて」カントの哲學と改題された事は後者との混同を避ける上にも好都合である。

「近世哲學史」がその頂點に至る發展の道程に於て示すところの特性は、それが近世の一般文化生活の諸運動をそれ自身に關係させ、又それ自身に合一するといふ處に存する。そうして此の事は近世哲學史の連續的進展の過程に於て、一般文化的諸傾

向が一部は繼起的に一部は時間的に並行して、その決定的意義を哲學的思想に對して獲得するといふ仕方であつたのである。此の過程の頂點も同様に、此の頂點に至る迄の歴史が一般文化諸傾向に於て時間上繼起的に、若しくは並行的に合一した處のものを體系に迄結合するといふ、從つて最初單に歴史の統一であつた處のものを體系的統一に構成するといふことに依つて規定されるのである。

近世哲學史の此の頂點を示すものが、即ちイマヌエル・カント(Immanuel Kant)の學說である。——篠原氏譯——この緒言最初の言葉が本書の意圖を明らかにして居る。即ち本書の特色として第一に擧ぐべきは、カント哲學を近世の歴史的諸傾向の「體系的統一」として考察するパウフの意圖であらう。その爲に、ゲッティンゲン叢書の獨立の一巻をなして居たカント哲學以前の哲學史的研究は、特に本書の第二章「前批判期の著述と批判的問題設定に至る迄の發展」の中に、カントの思想的發展との聯關に於て極めて簡単に要領よく檢討されて居る。力學上の特殊問題——加速度公式と運動量公式——を把へて、カントの力學上の業績をばデカルトとライブニッツの兩學說の間に存する外見上の「分析的矛盾」を綜合的統一に高めたものと論じ、更に兩者及びニュートン・ヒューム・ルソウ等のより一般の影響をカントが批判的に綜合した次第を論じて、批判哲學の極めて重大なる特色とパウフに考へられたその綜合的性格の萌芽を既に前批判期に發見して居る。パウフの歴史的考察は、カント哲學がそれ以前の哲學史上の諸體系と區別さるべき標識として、その綜合的な

「全面的傾向」を立證して居る。更にパウフの歴史的意圖はカントの人格性に迄及んで居る。第一章「カントの人格性と生涯」に於て、その人格性に存する最も有力な二つの傾向を「嚴密に合法則的に規定された認識慾と同様に合法則的に規定された宗教的・道德的根・本心情」と考へ、これが彼の生涯的勞作の全體にも指標的となつた」と云ふ事實を、カントの生活態度に即して記述して居る。

本書は E. Cassirer, *Kants Leben und Lehre*. と並んで、カント哲學入門書としては歴史的視野の極めて廣い妥當な解説を含むと思ふが、同時にパウフの歴史觀は本書の超え難い限界を明示して居る。緒言の中に示さるゝ如く、「一つの文化的威力として刻印」さるゝカント哲學の「歴史的研究所」が本書の目的であるならば、先行の諸體系とカント哲學の比較やカントの人格性の分析のみでは、この體系の歴史性は到底明らかにはなるまい。哲學史上の先行諸體系との相互比較のみでは、パウフ自らの云ふ様な「一般文化諸傾向」の歴史的統一をカント哲學が體系的統一に高めた事實は未だ論證されたと云へぬし、カントの生涯や人格性の傳記的記述も、この體系の理解に有效な「指標的」補助手段ではあらうが、同じくパウフ自らの云ふ様な「その中心が學說其物の中にあるのではなくて、寧ろその述者の人格性の中に存する」と云ふ人格性の深い構成的意味は理解し得ない。一般にパウフの取扱ふ歴史的現象が、カント哲學と單に並行的な關係にある挿話の如きに留まつて居る事は、「歴史的統一」をば「一般文化諸傾向」に於て時間上繼起的に、若しく

は並行的に合一」すると云ふ風に考へて居た當時のバウフの歴史觀からすれば餘儀ない事であつたらう。従つて「單に歴史的統一であつた處のものを體系的統一に構成する」と云ふカント哲學の歴史的規定も、バウフに依つては歴史的現象としての哲學史上の諸體系やカントの人格性を單に「繼起的」あるひは「並行的」關係に於て考へる事に依り、換言すれば本來の構成的歴史性を廢棄する事に依つてのみ理解されて居る。かゝる歴史性の廢棄と云ふ代價に依つてバウフのカント解釋は第三批判を先行の兩批判の綜合と考へる極めて統一的な整合性を持つ様になつて居る。併し乍ら、自然とか自由とか目的とかの中心問題を考へる場合にも、新カント派の「規範」と云ふ觀念で極めて概念的に處理されて居るので、分析の不徹底さを感じさせる點が少くない。個々の問題に就いて云へば、認識論に關しては譯者も指摘して居るゝ如く、「先驗論理的又は先驗批判的視點を徹底して一種の客觀主義に向ふと共に、他面尙先驗心理學的契機を輕視しない」のであるが、認識の可能性に關する間が認識の「妥當性と價值」とに就いての「規範」の問題に轉化され「構想」とか「圖式」の問題の分析は甚だ不徹底であり、従つて先驗論理的立場と先驗心理學的立場の如きも單に平行的に論述されて居るに過ぎぬ。同様の事情からして、實踐哲學に於いては惡の自由—宗教論に於ては善と同じく可想的性格に於て考へられて居るのであるが—の問題も充分に考へられて居ない。カント哲學の頂點を示すべき目的論に關して云へば、目的概念をば單に有機體の發展と構造を理解する爲のものとなし、ダーウィン・ワイズ

マン・リープマン・ヘッケル・ヘルトウィッヒ・クラーク等の進化論や原型質學說その他の生物學的問題との類推に於て考察するに留まり、第二批判の範型論、更に又宗教論の始めに説かるゝ惡を媒介として止揚する轉換的行爲に基礎づけらるる道德的目的論は徹底的に無視されて居る。そして、目的論を單に生物學的問題として考へて、人格的行爲に於て自覺的に成立する道德的合目的性を考へぬ限り、たとへ「世界原因としての最高悟性」たる神の理念を以つてしても、第三批判に於てカントの體系的統一の完成を見んとするバウフの意圖は根本的には決して達成されぬであらう。

譯文に就いては、術語以外の日常的語法の二、三の生硬な譯を除いては、哲學用語及び文章共に大略適切なものと思はれる。殊に原書にない多くの譯註や索引を附せられた事は、カント哲學の入門書として極めて妥當な事と思ふ。たゞ原書にない引用文の出典を譯者が特に挿入なさるならば、様々の異版本に依るより、何れかの完全な全集版に統一された方が便利である。尙誤植と思ふが引用獨文に脱字や間違ひがある様である。
(理想社出版部定價壹圓八拾錢)(山元一郎)